
葉集を読む

松岡 隆子

風五月ものの命の光るなり

菊池 京子

新緑がもえ薫風が吹きわたり爽快感あふれる五月、目に入るもの全てが光り輝く。(への命の光るなり)は当然と言えば当然で、季語も即きすぎかもしれない。

だが、(命とは拾ふものなり亀鳴けり)と、予期せぬ闘病の日々を乗り越えられた菊池さんにとって、退院の日の風はこの上なく眩しく、全てのものが涙ぐみたくなるほど愛おしく思えたのだ。俳句は個々のささやかな生活の記録である。掲句は菊池さん自身の真情の一句なのである。

黄泉路より沙汰なく梅雨の深みたる 矢作 裕子

同時作に(起き臥しの寡婦の呟き梅雨に入る)、(夫帰り来よ桜桃の色つけば)、(夫逝きてはや百日の青山河を見る)。

はや百日、桜桃の耀きも山河の青さも今は切ない。百日を経て諸々の事が一段落するころ、一段と哀しみが深まる。哀しみの中から生まれる俳句は、亡き人との心の対話である。夫君は常に矢作さんの心の中に住んでおられる。現実には声は聞こえなくても矢作さんには聞こえる声があるのだ。

出目金や機嫌のわるきコンピューター 河本 順

パソコンやスマホなどの電子機器を俳句に詠むのは難しいと思っていたが、掲句は実に軽妙に詠まれていて感心する。

コンピューターを使っている画面が突然変わったり、全く動かなくなってお手上げ状態になることがある。コンピューターも働きたくない時もあるのだろう。大切な相棒のコンピューター、「早く機嫌なおしてね」と、河本さんは優しい。出目金と言えば、突出した眼球を傷つけないよう注意して飼育しなければならぬ。出目金と不機嫌なコンピューターとの取合せは現代の俳諧味。